

満洲紀行

執筆：竹内 一郎

編集：菅野 智博

凡例

- ・旧字体や異体字は常用漢字、旧仮名使いは現代仮名使いに変換した。
- ・本史料の史料としての性質を考え、各表現を原文のまま掲載した。
- ・各段落の最初は1文字を空けて編集した。

本文

門司より大連へ

夏休みに父のいるあこがれの新京に行くことになって僕はうれしくてたまらなかった。博多駅前のお阪商船会社出張所で七月二十四日門司出帆の鴨緑丸二等船室の予約が出来新京までの切符も買って出発の準備もすっかり出来て七月二十四日吉塚駅を九時十六分発の汽車で出発した。門司駅に着くと鴨緑丸の巨体な船体が岸壁に横付けになっているのが間近く見えてうれしさに胸が高鳴るのをおぼえた。

税関の手続きも簡単にすみタラップを

上って三名定員のこじんまりした室によそのおばさんと一緒にはいることになった。ブリッチに立って港のざわついた光景を眺めているうちに出帆を知らせるドラが鳴り軍艦マーチが奏せられはじめて汽笛とともに船体は静かに岸壁をはなれはじめた。見送人の中にはハンカチで目をおさえている人もあった。僕は遠ざかり行く港をじっと眺めて嬉しいようなさびしいような気分で一つぱいになっていると食事のドラが鳴ったので我にかえった。食事をすませて又甲板に出て見た。船旅は始めてであるうえに巨船なので室

にじっとしてられない。まず三等室から見物をした。次に一等室に行って見た。ここは三等とくらべ物にならぬ程りっぱだった。二時頃船がゆれ出した「チェッゆれだしていやだなあ」といっている人もあるし小さい子供たちは「ゆれだした、ゆれだした。」とはしゃいでいる。夕食は母がたべたくないといったので一人で食堂にいった。食後又甲板に出るとそばにいた兵隊さんが、「君どこに行くんだい。」ときかかれたので「新京に行きます兵隊さんは?」「僕か僕はハルピンに行くんだよ。航空兵さ。」といわれた。しばらく話していたがねむくなったのでお別れして室にかえった。僕のねる寝台によそのおばさんが寝てしまっていたので上段に寝た。

何時頃か僕はどしんと床の上にくろがり落ちた。はっと思うのと同時に寝台にかかえ上げられたが何だかぼんやりした気持ちだった。母がボーイさんと呼んで下さいといっているのをかすかに聞いた。やがてボーイにおぶさって医務室に連れて行かれた。お医者がいろいろ診察して、「大丈夫です。おいしいお薬を上げましょう。」とおっしゃった。翌朝すこし頭がいたかったが午頃には元気になった。今朝から大へん濃霧がひどくしきりに汽笛を鳴らしていたが大分船はおくれたらしくボーイが「アジアには間に合わないかもしれません。」といってきたので僕はきがきではなかった。

朝霧のあい間に小さな島の間を船がとおって居た。朝鮮の西南にある多島海だ

ろうと思っていたが、午後になると島も見えなくなって海上にはトビウオが飛んで居た。夕方甲板に出ると夕日が空も海も真赤に染められ今水平線の彼方に沈まんとして居るところであった。その美しさ、何にたとえ様もなくただ感歎の声をのんで見とれるばかりだった。大海原で見る水平線ははてしもない雄大な丸い物だなあと思ってるうちに夕日は全く沈みカモメが二三羽飛んで居た。ふっと横を見ると昨日の兵隊さんも見ておられた。僕に挙手の礼をなさったので僕もうやうやしく礼をかえした。

三日目の朝は皆早く起きて甲板に出ていた。今日大連に着くので胸がわくわくしてねむれないのだろう。僕もそうである。

間もなく大連港らしい島がかすかに見えだした。大連港に近づくとジャンクが幾くつも流れるように走っている。急行に乗る人と大連に下りる人との下船場がちがうので同室のおばさんとお別れしてそれぞれの場所に着いた。その内に検疫船がやって来た。一時間位かかるだろうときいて居たが、三十分位ですみ、いよいよ船は大連港の岸壁に横づけになった。もう一日も乗って居たいと思っていたが、早く大連の地がふみたくくなって、胸をわくわくさせながらタラップを下りた。いよいよあと一歩だ。僕はよしと力いっぱい元気に満洲の玄関口である大連に第一歩をふみしめた。

大連から奉天へ

大連駅に行く人達のために連絡バスがまって居た。大連埠頭には苦力達が大勢働いて居る。バスの窓から眺める大連の街はなかなかりっぱそうであるが見物するひまもなく大連駅に着いた。駅には満人の赤帽がたくさん働いて居る。満人ばかりなので母が一寸まごついて居たが一人の赤帽に荷物をあずけここでも税関の検査をうけ、さっさとハトに乗りこめば赤帽がもう席を取っていてくれた。

一番に車内の広いのに驚いた。「はと」は静に動き出した。速力のまして来た頃には人家もなくなり早くも平野ばかりになった。

太陽がキラキラと広い平野いっぱいにてりつけていてとてもあつい。沿線の楊の木にかささぎの巣のあるのも見えた。熊岳城に近づくと望小山も見え出した。日露戦争の時山の頂にある小さな塔をロシア兵の斥候と思って一生懸命射撃したということである。あれを人間にしたらどんな大きな人だろう思ったらおかしかった。外の景色にもあきた頃食堂の案内があったので、食堂に入った。しばらくすると遼陽の白塔が緑の木立につつまれて美しく立っているのが右窓に見える。大石橋辺までは近くに岩山が見えるが奉天に近づくと大平原になって畑にはトウキビの様な物が作ってある。後どきいたら高粱だということだった。土をかためた様なものポツンポツンあって小さな入り口から人が出入りしている。不思議に

思って眺めているとそばのおじさんが「クリーたちの家ですよ」と教えて下さった。

すこしうとうと眠った間に奉天に着いた。

奉天に着いて駅の大きくてりっぱなのに驚いた。ここでも満人の赤帽が忙しそうに働いて居る。駅に出ると満洲国の飛行機が三機飛んで居た。すぐタクシーに乗ったが母が番地をわすれたので運転手が困った顔をして居たが、名前をいったら「ああ、あのお宅ならいつも御ひいきになっています」とすぐわかった。街にはヤンチョ・マーチョがたくさん走って居る。どこかでしきりに花火があがって居る。突然行ったのでおじさんもおばさんもびっくりなさったが大変喜んで迎えてくださった。はじめてヤンチョというものに乗って大和ホテルに連れて行ってもらった。ホテルの前の広場には明治三十七八年戦役の記念碑立って居てその前に日本皇紀二千六百年奉祝大会という旗がたててある。一週間のお祝がつづいて今日が最後の日なのだそうである。昼の花火も奉祝の花火であったことがわかった。高い所から見る奉天はまことに平な大都市である。遠くに北陵の松林が小高く見えて居た。屋上に開かれて居る食堂のテーブルには日本人や外国人が食事をしている。白系露人の楽手たちのかなでしてくれる音楽の美しいメロディに耳をかたむけながら映画を見て居る様な気持ちで食事をすませた。町をすこし見物して

帰ったのが九時半過ぎ、昼間にぎやかだった前の通りもさすがにしんみりしてどこからかさみしいコキユウの音が流れてくる。

翌日光子さんに千代田公園に連れていってもらった。ヤンチョのニイヤンが光子さんに何かいっていたが、光子さんがいきなり「ヤーメンソウワ」とおっしゃったら「ヤーメンソウワプシン。」といて変な顔をした。とてもあつかった。翌日はおじさんが北稜に連れていって下さることになった。ハイヤーで奉天の街を見物しながら先ず同善堂に降りた。ここは不幸な人達の世話をするとこで赤ちゃんを捨てる時には台の上ののせるとベルがなる仕掛けになっていて、捨てられ赤ちゃんたちが一室に四五人ずつ育てられていた。骨と皮ばかりにやせた赤ん坊も居た。片わ者、老人たちといろいろの部屋があった。案内してくれたクーニャンに御苦さまといて又車に乗った。城内の満人街はとてもきたなくて、くさくて、むせる様な気になったが北陵はまことに静かな気持のよい所であった。奉天にもお別れしてよいよ新京に行く事になり此度こそ「アジア」にのりたいたいと思って二三日前から申込んで居るが「アジア」の急行券がなかなか手には入らない。幾度も幾度も電話をかけてやっと一等ならありますといたので一等の急行券を母が買った。僕はアジアの一等に乗れるかと思ったら嬉しくてたまらない。奉天駅でまってる居ると大きなアジアがすべる

様にホームに入って来た。おばさんたちにあいさつをしてアジアに乗った。車窓は二重窓にびったりしまって開く事が出来ないのでガラス窓に字を書いたら他の人の見送りにきて居た人たちまで読んで笑って居られるのに気がついて一寸きまりがわるかった。

奉天から新京へ

八月一日十三時五十分、アジアは流れる様に動き出した。奉天の近くまではぼつんぼつんとある百姓家の形が■[挿絵]であったが、それからは■[挿絵]形になっている。北支那式と北満式ということである。冷房装置がきかなくてアジアの中はむし風呂の様なあつさである。車掌さんたちがしきりに調設して居たがだんだん涼しくなるととても気持がよくなった。はてしもない大平原をアジアはすばらしい速力で走っている。空には面白い形をした雲が浮んでいる。車掌さんが時々お茶やおしぼりを持ってきてくれる。四平街で一度とまったきり、アジアはばく進にばく進をつづけて居る。車掌さんが「間もなく新京でございます。」と案内にきた。窓を見ているとりっぱな建物の屋根が見え出して来た。又僕は胸がおどりと出して来た。十七時二十分アジアは新京駅にピタリと止った。

父が出張中なので古海さんが迎いに来て下さった。すぐ古海さんの所に行った。泊って行く様にすすめられたがおことわりして尹さんという方に父の家を送って

もらった。其の夜はゆっくり旅のつかれを休すめた。

翌朝は雨であった。コンクリート造りの同じ様な建物ばかりならび庭にはみなトマトが作ってある。外に出る度に自分の家を間ちがえておかしかった。母は満人相手の買物に大困りである。新京に着いてからは雨ばかり降って居る。満洲の夏はあつく冬は寒いものと思っていたのに毎日涼しくて寒い位である。

シャツを二枚重ねてもさむくてふるえる事があった。奉天では昼も夜も物さわがしかったが新京は実に静かである。毎日たいくつでさみしくて勉強する気になれないで、父の帰えりばかりまたれた。雨の晴間に交通会社の佐藤さんとはじめて街に出た。先ず道路の広いのに驚いた。新京には電車がなくバスが通って居る。児玉公園に行ってみた。長春時代からそのままの姿でのこって居るのだそうだがもううす暗くてよく分らなかったが、大変広くて柳の木の大いのが目についた。

七日父が突然帰ってきた時が実に嬉しかった。「お迎へに行つて上げられなくてすまなかったね。すこし見物しましたか。」とおっしゃった。「一昨日佐藤さんと一寸出たきり案内人なしではまだこわくてどっこも。」といったら、「それではこれからお父さんが案内して上げよう。其の前に観光バスに乗ると新京の概念がわかっていいね。」という事になり翌日さっそく電話で申込んだが満員だった。その翌日は父にさしつかえがあったので母と二人

で行った。幾台かのバスに分乗して新京駅を出発した。ガイドの説明によると新京は以前長春といったが満洲国が出来てから、其の名の様に国都建設計画によって出来た新しい街で、特別市の面積だけでも四百六十平方軒もある大きなもののだそうである。新京の道路は幹線（路幅二十六米——六十米）と支線（十米——十八米）と補助線（十米以下）に分れて重な交叉点はロータリー式になって居て、一番大きい大同広場は周囲一軒もあるそうである。

まず忠霊塔におまいりするのためにバスを下りた。白く美しい玉砂りを敷きつめた中に高さ百十六尺の立派な忠霊塔は見上げるばかりに高い。護国の英霊に心からの感謝の祈りをささげた。忠霊塔を背景に一同揃って記念さつえいをした。次は寛城子で下りた。ここは淋しい所で記念碑がぼつんと一つあるきりであった。ここでも黙とうをささげた。次に南嶺は満洲事変中の最激戦地だったのでそうである。兵營のそばにはいくつもトーチカがあり木立がうっそうとして居て、当時の我が軍の苦戦が思いやられた。二十四柱の勇士の方の墓に一つ一つていねいにおまいりをした。ここでしばらく休んだ。僕もスタンプをおしたりした。お墓のある後の方は眺望のひらけた気持のよい草原で秋の草花が咲いて居た。空はからりと晴れ渡り水源地である浄月たんが間近かにはっきり見える。間もなく又バスに乗り満人街に出た。ゴタゴタ並んだ店の

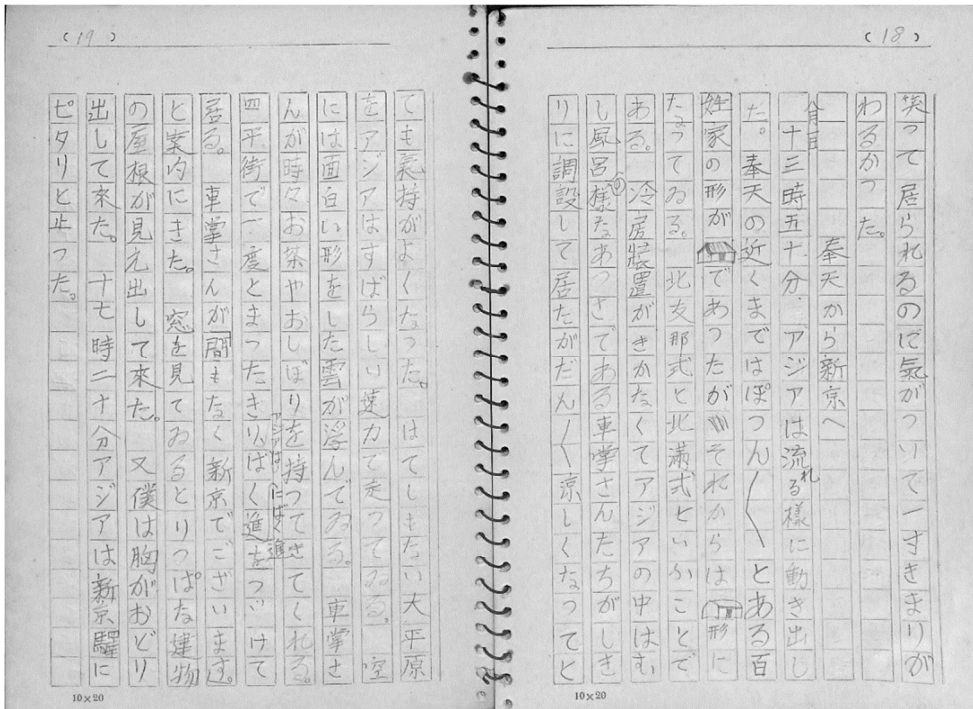
前に赤や青や黄色の布で作った旗やまろい房などがさがって居て、色なり形なりで肉を食べさせる店、お菓子屋、お風呂屋などがわかるのだそうだ。今日の観光バスに乗って僕は満洲国のいかに広いかという事をしみじみ感じた。それは動物園を見てからである。動物園の前をバスが走るのだが、走っても走っても動物園はつきない。ドイツのハーゲンベック動物園の十倍・上野の動物園の三十倍、等々に僕はぼかんとしてしまった。猛獣どもは密林を作って全部はなしがいなのだそうである。しかしセットが多く裏にまわるとガランドだと父からきいた。まだ全部出来上って居ないのだそうだがお猿の岩山がバスの中から見えた。「動物はオリに入れて人間が見るのが普通でございますが、ここでは人間がオリの中にはいって動物を見物するのでございます。」とガイドが言って皆を笑わせた。前も後も右も左もはてしもない広い広いもので動物園なんかは新京特別市のごく一小部分に過ぎないのにこの広さ。僕は大陸の広さにただ感心するばかりだった。建国広場から新京駅まで大同大街の大きな道路が一直線につづいている。向十軒とかいったがよくわからなかった。バスは安民大路から順天大街のドロや柳の多い路を走って行く。

産業部・交通部・司法部・治安部・國務院・などさまざまな形をした建物が樹木の間々に建っている。ことに堂々たる国

務院の建物が目立ってりっぱなのはのびゆく満洲の国都を物語っている様である。宝山デパートでさっきの記念写真が出来上がって居た。ここで一日の観光を共にした人々と別れてデパートの屋上に上って見た。南嶺では間近に見えた浄月潭の山々が遠くかなたの地平線上に紫色に浮かび上った様に見える。左には宮廷の黄色お屋根が一きわ目立っている。これで北より東南西の順序に新京を大体観光した。時間は約三時間であった。

ハルピンにも行くつもりだったがコレラが流行しているのでもう今年はやめることにした。そのかわり吉林に連れていってもらはずだったのに、その日は雨で駄目になり、ざんねんだった。新京は父にあっちこっち連れて行ってもらったので大分くわしくなってきたが学校の始まるのも間近になったので、来年の夏を父と約束して一ヶ月のたのしい思い出を新京に残して帰りは朝鮮を通過して帰えることにした。

「二学期も元気にしっかり勉強しなさい。」と言って見送ってくれた父に「さようなら。」を言っただけのぞみの車中の人となった。時に八月二十八日十八時五十分であった。終



「満洲紀行」原文 (18-19 頁目)



新京忠霊塔前でのツアー集合写真
(前列左から3人目が一郎氏)